

文化ゾーンにおける鳥類の調査

チームメンバー：桑原萌葉・田中香帆・辻井麻織・安田朝香
担当教員：横田岳人

目的

文化ゾーンに生息する鳥類の観察を行い、どのような環境に生息しているかを調査する



方法

○ラインセンサス

→文化ゾーン内(図1参照)の決められたルートを歩き、観察できた種を記録した

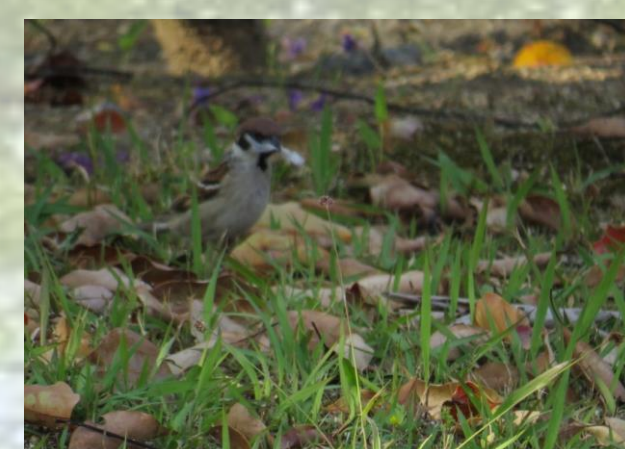
○スポットセンサス

→文化ゾーンの12地点(スタート, ゴール, A~J)を定点観察場所とし、3分間の定点調査を行った

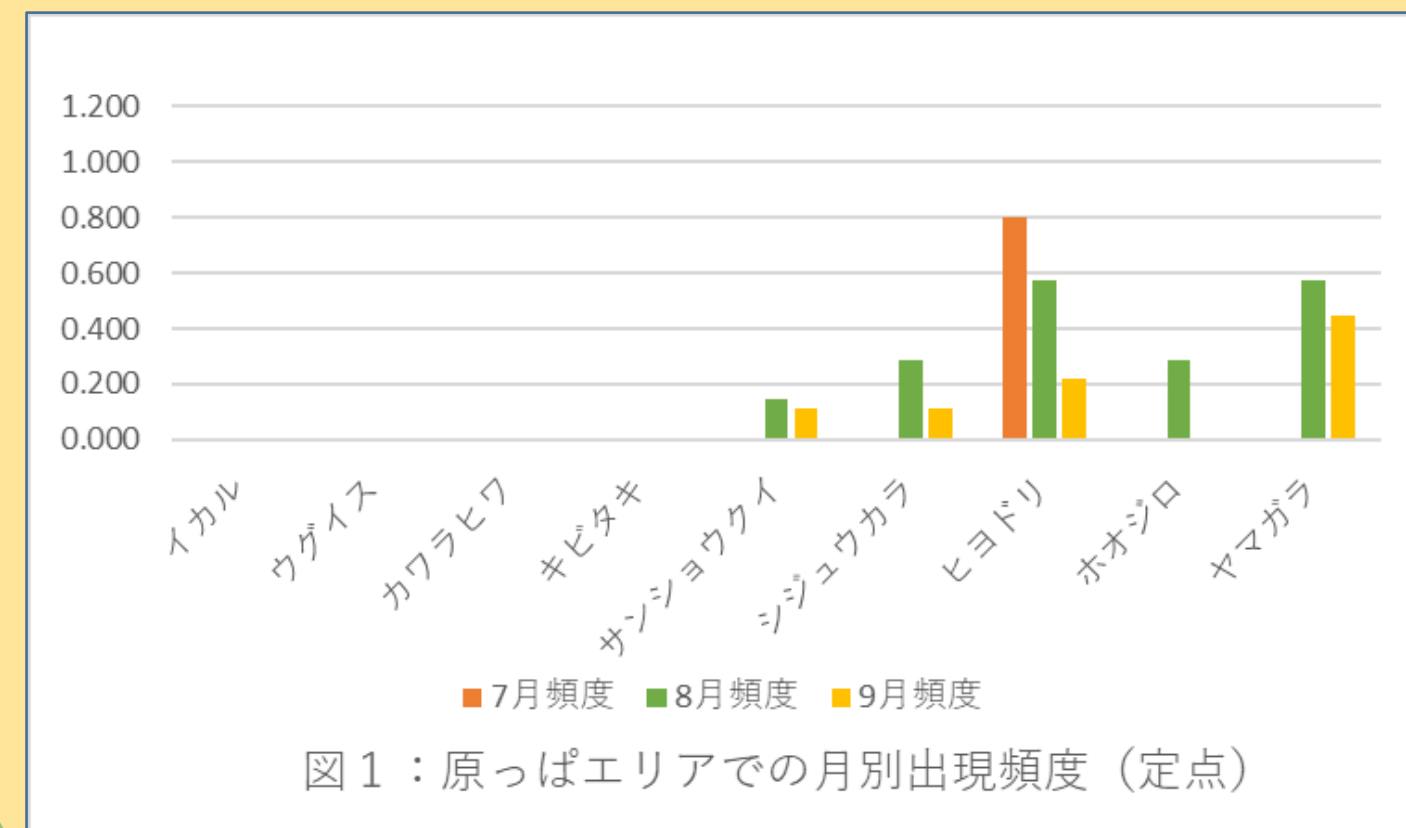


原っぱ (A↔B↔C)

スズメ	コゲラ	ホオジロ
ムクドリ	ヤマガラ	サンショウクイ
ヒヨドリ	シジュウカラ	ハシブトカラス
ハシブトカラス	コシアカツバメ	ハクセキレイ
ツバメ	メジロ	カワウ
合計	15種類	



定点実施回数:
A地点→7月:2回, 8月:2回, 9月:2回
B地点→7月:1回, 8月:3回, 9月:3回
C地点→7月:2回, 8月:2回, 9月:3回

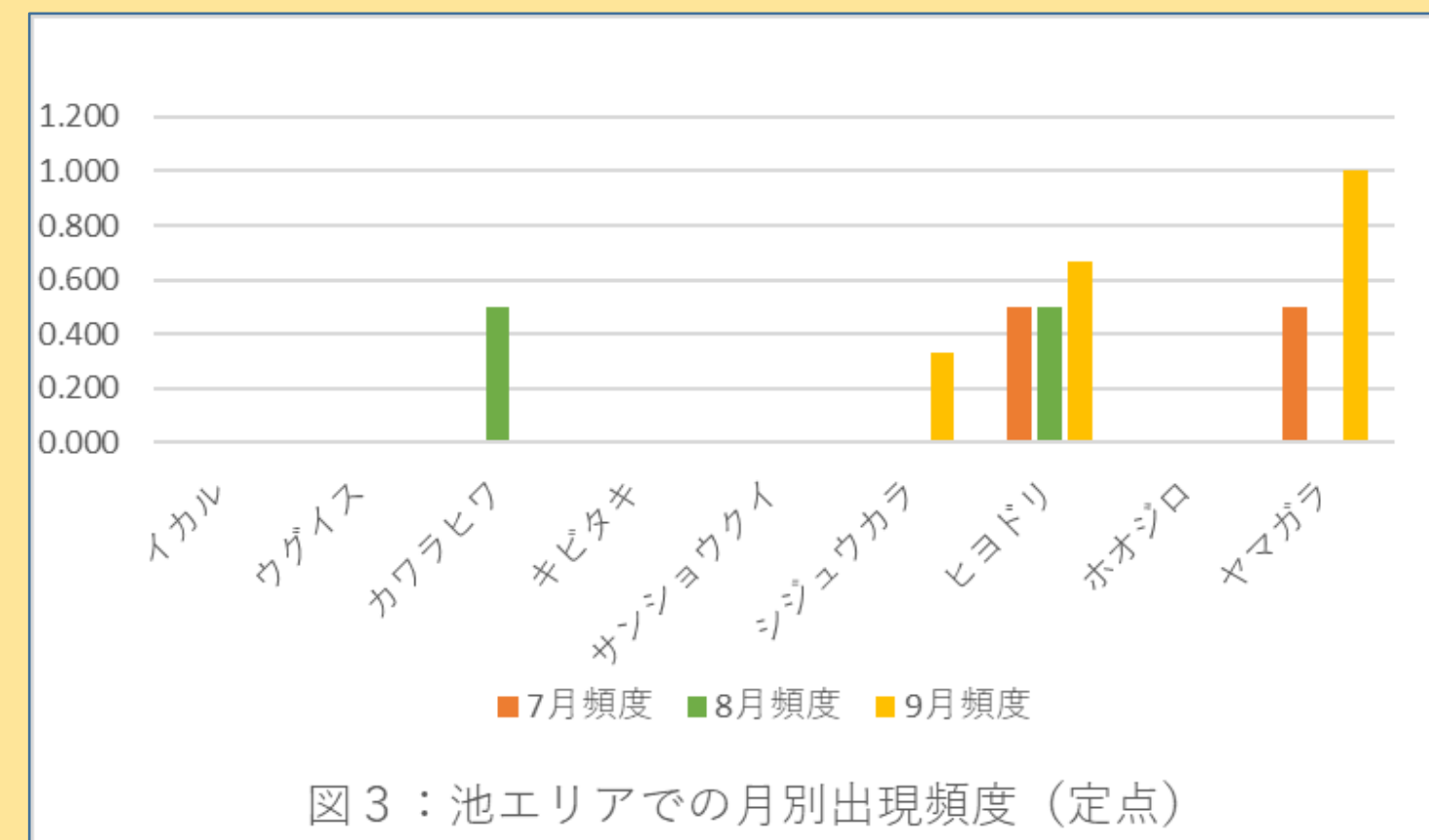


- ・月の経過とともに... 出現頻度→減少 出現種数→増加
- ・サンショウクイのような、渡りを行う鳥類が確認された。

池 (定点E)

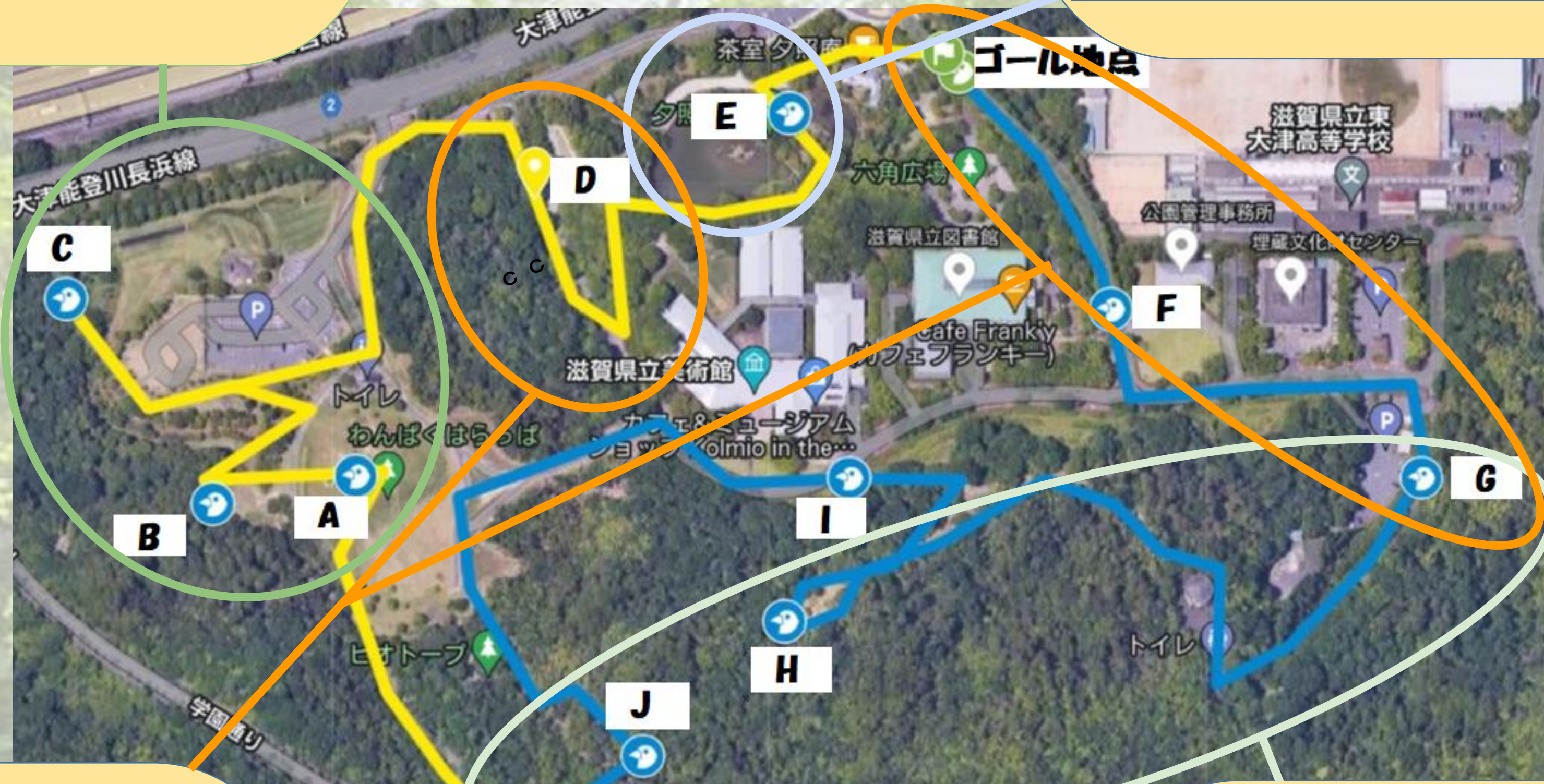
ヒヨドリ	ハト	カワラヒワ
コゲラ	カワセミ ※1	ツバメ
ヤマガラ	メジロ	シジュウカラ
ハシブトカラス		
合計	10種類	

定点実施回数
E地点→7月:2回, 8月:2回, 9月:3回



- ・ヒヨドリ、ヤマガラの頻度が高い傾向になった。月の経過で上記の種の出現頻度が上昇。
- ・水辺を生息域にするカワセミや、草の種子食のカワラヒワが見られた。

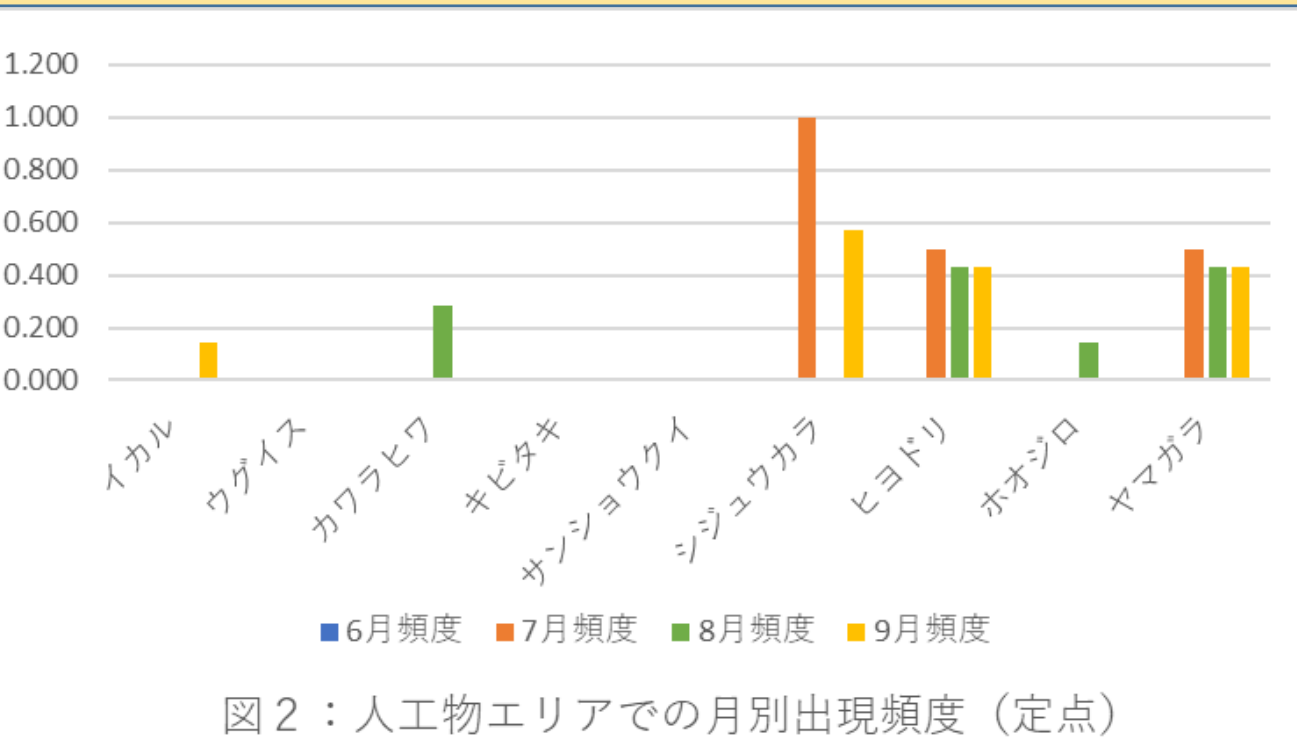
※1:カワセミは定点では確認できず



人工物 (D↔E, F↔G, ゴ↔F, I)

ヒヨドリ	メジロ	ハト
ヤマガラ	インヒヨドリ	カワラヒワ
スズメ	ハシブトカラス	キジバト
ツバメ	ハクセキレイ	イカル
シジュウカラ	ハシブトカラス	コサメビタキ ※2
ホオジロ	コゲラ	トンビ
合計	18種類	

定点実施回数
D地点→7月:2回, 8月:1回, 9月:3回
F地点→8月:3回, 9月:2回
I地点→6月:1回, 8月:3回, 9月:2回



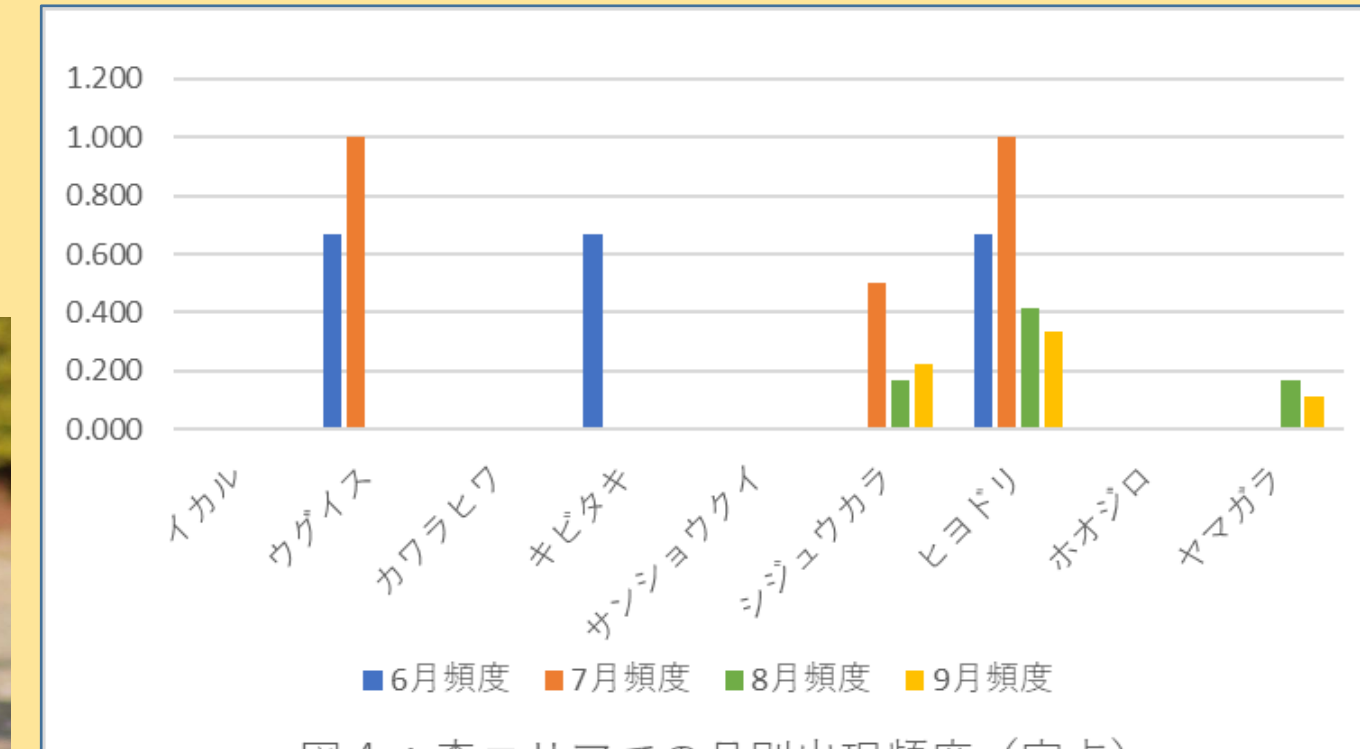
- ・1地点: ツバメやトビなど、開けた場所を巡回する種が6月に出現頻度が高かった。
- ・木の実食のイカルや昆虫食のコサメビタキが見られた。

※2:コサメビタキは定点調査では確認できず。

森 (ス↔J, H↔G)

ウグイス	メジロ	ホオジロ
ヒヨドリ	スズメ	キジバト
コゲラ	シジュウカラ	サンショウクイ
キビタキ	ヤマガラ	エナガ
ツバメ	ハシブトカラス	
合計	14種類	

定点実施回数
スタート地点→6月:1回, 7月:2回, 8月:2回, 9月:3回
G地点→8月:3回, 9月:2回
H地点→6月:1回, 8月:3回, 9月:2回
J地点→6月:1回, 8月:3回, 9月:2回



- ・ウグイスに関しては6月、7月に頻度が高いが、8月9月には見られなくなっている。
- ・6月のみキビタキが確認できた。

考察

・ウグイス少し開けた場所を好む

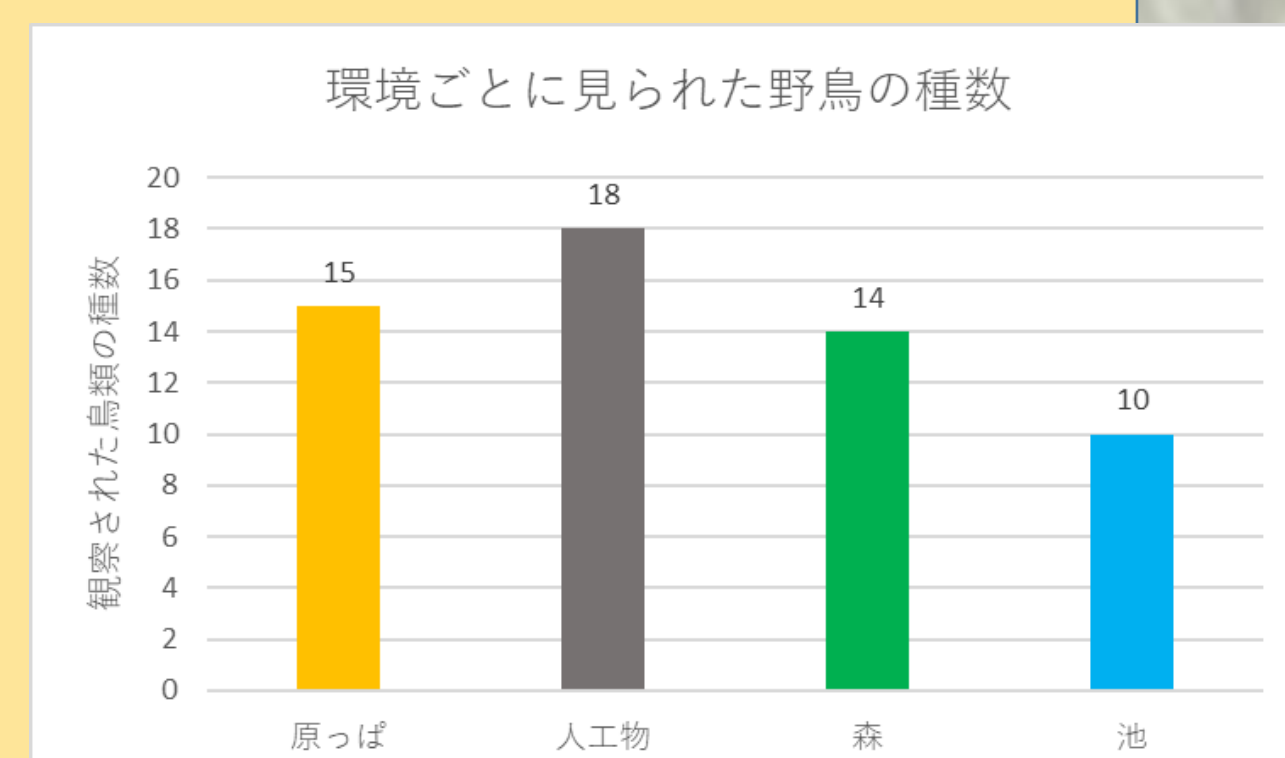
ウグイスは、ササ藪の中や低木の梢でさえ「♪ホーホケキョ」スタート地点とH地点は人工的に開かれた場所があるため、自然界のギャップのような役割を果たし、低木が生育しやすい環境になっているためウグイスが好む環境だと考えられる。

・ヒヨドリ多数目撃される

ヒヨドリは都市部まで生息範囲を拡大しているが、生息には樹木も必要である。文化公園は京都の郊外である大津にあり、かつ樹木が多く植えられているため、ヒヨドリの個体数が多くなったと考えられる。

・観察種数最多エリアは「人工物エリア」

建物だけでなく、植え込みや街路樹がある。他と比べて多様な環境で、多種の鳥にとって住みやすい。また、人間の近くを利用し、天敵から身を守る役割もあるのではないかと考えられる。



龍谷の森にいる哺乳類の調査

チームメンバー：桑原萌葉・田中香帆・辻井麻織・安田朝香
担当教員：横田岳人

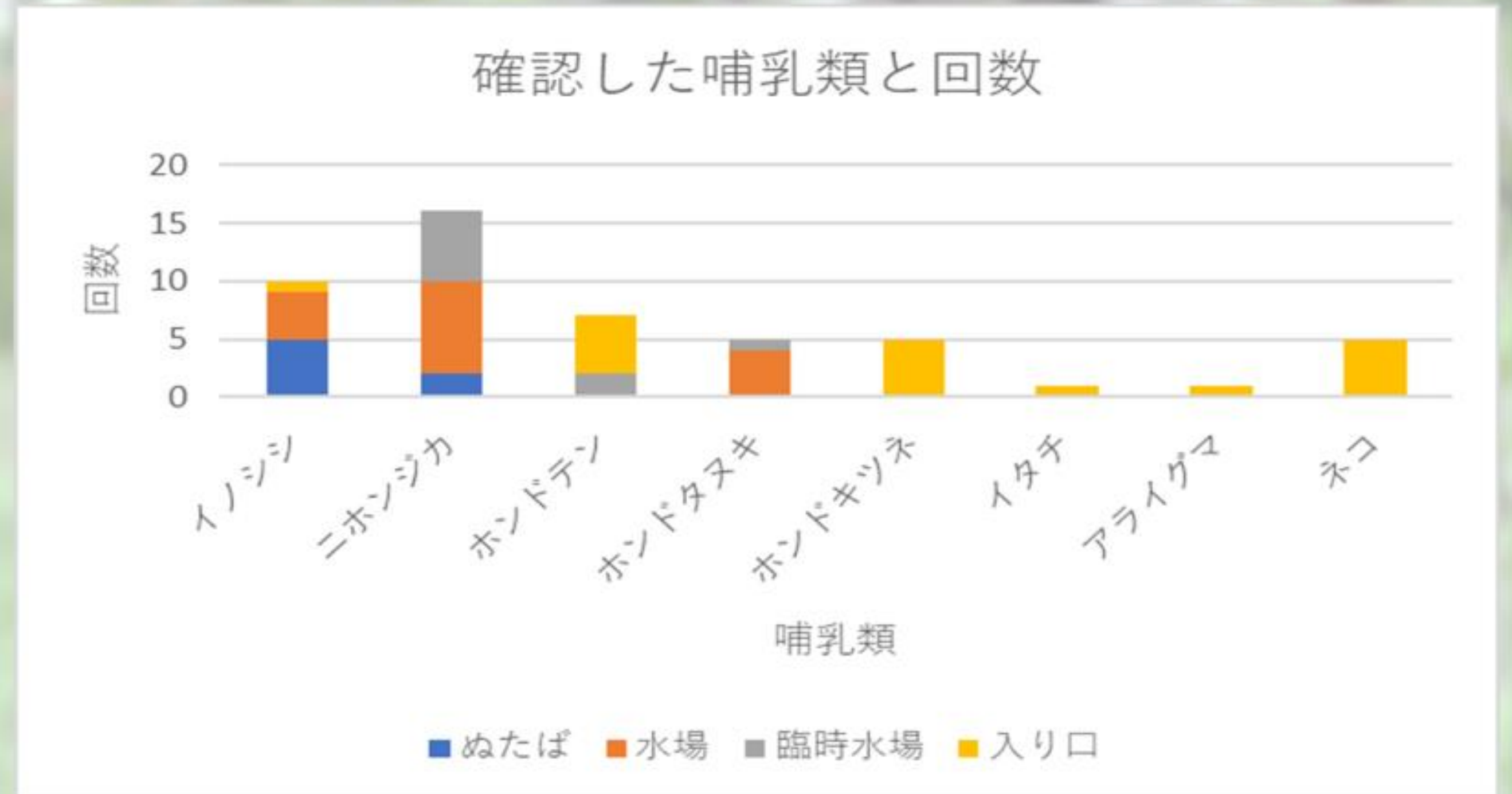


目的

龍谷の森に生息している哺乳類を中心とした動物を把握する

方法

- ・4地点に自動センサーカメラを設置
- ・1~2週間に1回カメラの点検（SDカード交換）
- ・記録された動物の種を特定する



- ↑各地点においてのカメラの撮影時間
⇒ぬたば：60秒、水場：30秒、臨時水場：30秒、入り口：10秒
- ・撮影期間
⇒ぬたば：6/20~9/14、水場：6/20~9/14、臨時水場：8/12~9/14、入り口：8/4~9/14
- ・撮影時間帯
⇒ぬたば：24時間、水場：17時~9時、臨時水場：18時~9時、入り口：24時間

✓他に見られた動物たち

- ・フクロウ
 - ・シジュウカラ
 - ・ハシブトガラス
 - ・ニホンカナヘビ
 - ・イソヒヨドリ
 - ・コゲラ
 - ・ハシボソガラス
 - ・カエル
- 合計8種類

結果

- ・哺乳類は8種類、その他含めると16種類確認できた
- ・最も多く観察したのはニホンジカで、水場の利用が多かった
- ・人が頻繁に利用する入り口でも哺乳類の観察が多かった
- ・ぬたばでの鳥類の観察が多く見られた
- ・水場を利用する哺乳類の種数に偏りが生じていた

考察

- ・移動通路（けもの道）の一部として入り口に哺乳類が多く見られた
- ・イノシシがぬた浴びをして身体に付着した虫を落としている
⇒その落ちた虫を鳥類は水浴びをしつつ、食べに来ていた
- ・水場は人工で作られているため、水が淀んでおり、水質が悪いため、使用する動物が少なかったと考えられる。

+α フン分析調査

目的

フンの内容物・採取場所から種を特定する

表 ホンドテンのフン一覧表

種名	ホンドテン		
内容物	昆虫	果実	昆虫・果実

方法

カプセルにフンを採取後、室温状態で保管

水で濃度調整したエタノールが入ったシャーレにフンを入れた

実体顕微鏡で観察し、内容物を調べた

まとめ

- ・6つのフンを採取
⇒5つはホンドテン、1つはイタチ
- ・内容物が匂いの強い動物性のフンはアリを引き寄せると推測する
- ・イタチ科の動物のフンを採取できた理由
⇒人目に場所にフンをする習性があるため
- ・同じ種でも季節によって食べる内容が変わる
⇒フンから種を特定することが難しいことが分かった
⇒種の特徴を捉えることが大切